

二〇一六年のレッドベリースタジオ：新たな利用 傾向と機材等の更新（札幌近郊演劇の現場から）

著者	飯塚 優子
雑誌名	Probe：舞台芸術通信
号	11
ページ	49-49
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002557/

二〇一六年のレッドベリースタジオ―新たな利用傾向と機材等の更新

レッドベリースタジオ主宰 飯塚優子

利用状況を見て印象的なことが二つ。まずライブの利用が増え、内容の幅が広がったことがあげられる。住宅街にあるレッドベリーでは、和太鼓やジャンベはどう工夫しても音がもれてしまいご遠慮願っているのだが、小山彰太で初めてドラムを可とした。九月には小山のソロドラム音嘶ライブも実現した。ほかにチェロのユード・ヴァンサン、ヴォイスの蜂谷真紀、トラパンベットの横山佑太、馬頭琴の嵯峨治彦、シタールの井上憲司と津軽三味線の山本竹勇による「饗宴」ツアー、タブラの逆瀬川健二、ピアノの板谷大、二胡の森敦志、ギターの笹久保伸、ケーナ等の岡田浩安、ブルージェラスのSTOVE、その他、実に多彩な内外のミュージシャンがアコースティックの魅力を競い合う場となっている。

もう一つの新しい傾向は、セミナーや合宿稽古など、目的をもって集い、じっくり創造活動に取り組むための利用が出てきたこと。日本演出者協会による国際交流セミナーは、海外と東京から講師を迎え一週間にわたって劇作の基本を探る試みだった。夏休みに三日間寝食を共にして演劇づくりに取り組む稲雲高校演劇部の合宿は二年目。また能楽師・安田登さんが来札した折に開催される謡のお稽古と寺子屋は、日本のみならず人類の文化の基層にせまる知のワンダーランドだ。

オープンから満一六年経って、照明や音響の機材がいずれも経年劣化で機能が落ちてきた。パーライト二〇個、ミキサー、CDプレーヤーなどを入れ替え、新たにLEDの全体照明や、ポータブルPAシステムも導入した。

またロゴタイプと案内リーフレットをオープン以来初めて、新しくデザインしていただいて二〇一七年から使い始める。今のところ、日常のフライヤーやホームページは、私の素人仕事で作成しているのだが、いくらかでもすっきり印象づけられるように改良したい。ホームページは近いうちにWebデザインの専門家にお願しようと思う。

こんな小さなスペースの、こんな小さな活動が、激動する今の世にどんな意味を持つのか、折に触れ考えるが、ただしっかりと目を見開いて、目の前のものを、出来れば見えないものをも、見定めたいと願っている。そのための出会いと交流の場として、この空間が息づいていけるよう努力したいと思う。

「ともにある。わかちあう。ひびきあう。うれしいね。」新しいリーフレットに載せたレッドベリースタジオからのメッセージです。